天地創造の神と日本人の信仰心

2015年9月25日
西九州伝道所　佐々木正明

はじめに

プロテスタント・キリスト教が日本に入ってきてから、もう150年以上になりました。私がクリスチャンになってからでさえ、すでに半世紀をすぎています。でも、とても不思議なことがあります。日本人は何でも上手に、自分たち合うように改良しているのに、キリスト教だけは、ほとんど日本人の手が加えられないまま、ここまで来ているのです。

確かに、一所懸命に福音を日本化しようとして、本来の聖書の教えから少しばかり離れてしまった、無教会主義の試みがありました。死者への想いを大切にする日本人の心に配慮するあまり、本来の聖書の教えをわずかばかり歪めてしまった、原始福音の努力もありました。他にも、日本の文化や宗教に適応しようとして、シンクレティズムの傾向を強くした例もあります。

ところが、聖書を誤りのない神の言葉として真剣に学び、その教えを忠実に保持することを絶対の条件としながら、日本の文化と宗教、そして日本人の宗教心を学び、日本人的な創造性をもって考え、日本人のためのクリスチャン神学を構築し、日本人的なクリスチャン信仰の形態について説こうとする働きが、まだあまり興っていないのです。筆者は、日本の宣教の行き詰まりの大きな原因の一つが、ここにあると考えています。日本人は宣教150年を経てもまだ、西欧人の築き上げた神学を一方的に学ぶだけで、日本人として、自分の目で聖書を読み、理解しようとしていません。日本人のための福音の理解、日本人のための神学の構築が、まだできていないのです。

福音は本来普遍的なもの、全世界のすべての民族を対象としたものです。神は福音を普遍的にするため、イスラエル民族を選び、その中に、救い主を生まれさせられたのです。福音が、イスラエルの文化の折に閉じ込められて、単なる民族宗教に留まってしまいそうになったとき、神はパウロという人物を起して、福音の普遍性を明らかにしてくださいました。福音の普遍性

とは、神の救いの計画のはじめから、全民族の救いが目的とされていたことです。日本人の救いも、最初からそこに含まれていたということです。

　日本人はイスラエル民族への救いの神学にも、西欧人の救いと信仰形態のための神学にも、留まる必要はないのです。日本人はイスラエル人の救いの「おこぼれ」を頂いて、感動していてはならず、西欧人のために作り上げられた神学の「お古」をもらって、いつまでも喜んでいてはならないのです。福音は、初めから日本人に対するものでもあったからです。だから日本人は、福音を日本人的に理解する必要があるのです

　ただし、ここでもういちど明白にしておきたいのは、日本人のキリスト教を作るということは、聖書の教えを離れて、擬似キリスト教を作ることではありません。日本の文化や宗教の「いいとこ取り」をして、シンクレティズムに陥ることでもありません。あくまでも正当なプロテスタント主義として、聖書の正しい読み方をし、その聖書の読み方の許容範囲内で、キリスト教の日本的なあり方を考えるものです。

この問題について、筆者は今まで様々な機会に語り、また書いてきました。しかし、まだまだ理解されていません。ですからこれからも角度を変え、視点を変えて語り続け、書き続けなければならないと感じています。

Ⅰ．日本人の躓き

　日本人がキリスト教に躓いてきた理由はたくさんありますが、その最大のもののひとつは、キリスト教の非寛容性だと思います。日本の文化と宗教に対して、殆どの宣教師、牧師そしてクリスチャンたちは、敵対的な態度を取ってきました。その理由は、聖書が教えるところによれば、神がもっとも忌み嫌われるものが偶像礼拝であり、日本の宗教は、その偶像礼拝に当たるからだというのです。その上、日本の文化と宗教は切っても切れない関係にあるから、日本の文化自体が偶像文化であり、変えられなければならないと主張し、日本人の多くを敵に回しているのです。これは聖書のまったくの読み違いであり、欧米キリスト教の間違いです。でも、今や世界中のキリスト教が、この欧米キリスト教の間違いを、鵜呑みにして受け入れています。そして、多くの国々で不要な軋轢を生み出しているのです。

　18世紀から20世紀初頭までのイギリスやアメリカには、キリスト教文化至上主義という、とんでもない独りよがりの感覚があって、世界中をキリスト教文化に変えてしまおうという、鼻息の荒い宣教師たちも少なくありませんでした。宣教を主目的としていなかった欧米人の多くも、鼻から、日本の文化は下等な文化、劣った文化、神に嫌われる文化と決めつけて、それを学ん

でみようなどという、奇特な人間はまさに希少生物でした。なかでも、伝統的な千年期後再臨説をとっていた者たちは、世界中がキリスト教文化となった暁には、もっともっと良い世界が実現し、そこにキリストが王として再臨してくださると考えたのです。

宣教に熱心な宣教師はさらに過激で、神道も仏教もそれらに関係する新興宗教もみな、十把一絡げに偶像教として憎み、排斥しようとしました。そのようなキリスト教に、日本人は躓いてしまったのです。さまざまな文化的障害を乗り越えて、やっとキリストを救い主として受け入れることができた日本人たちも、日本の文化と宗教、伝統と習慣の中で、自分の信仰を貫いて生きることには、並大抵ではない困難を感じています。実際、一度キリスト教信仰を告白した日本人の多くが挫折し、心ではキリストに親しみを感じながらも、教会生活を離れてしまったのです。

Ⅱ. 基本的な聖書の読み違い

では、欧米キリスト教は、どのように聖書を読み違えてしまったのでしょう。それは非常に単純な間違いなのですが、あの旧新約聖書という非常に厚い書物を、正しく理解することは困難だという当たり前のことのほかに、そうならざるを得なかった素地もあったのです。

聖書の教えに立つと主張するプロテスタント・キリスト教が発生し、印刷機が発明されて大量の聖書が印刷され、多くの人々が聖書を読めるようになったのは16世紀になってからのことです。それにいたるまでの長い期間に、聖書の教えとはかなりかけ離れたキリスト教、しかもヨーロッパ諸国を支配する程の強大なキリスト教が、すでに出来上がっていたのです。聖書を唯一の権威とするプロテスタント主義が生まれたからといって、彼らの聖書の読み方自体が、決定的に、当時の伝統的キリスト教、聖書の教えとはかなりかけ離れたところがある、それまでのキリスト教の強い影響を受けていたのです。

聖書の権威を主張するプロテスタントの人々は、聖書という書物を、神が、自分たちに与えてくださったものとして、読み解こうとしました。その態度は完全に間違っていたわけではありません。確かに聖書は「広い間接的な意味」では、全人類に与えられたものだからです。もう少し狭めた意味では、クリスチャンたちに与えられたとも言えなくはありません。しかし「直接的には」つまり、正確な宛先は、違います。旧約聖書が与えられたのは、直接的には、あるいは厳格な意味では、あくまでもユダヤ人というひとつの民族だったのです。

新約聖書は、多分ルカ文書を除いては、すべて、ユダヤ人をも含むクリスチャンに向けて書かれたものです。ルカ文書も、同じだと考えても差し支えありませんが、もしかすると、クリスチャンになりかけていた、テオピロというひとりの人物の可能性もあるという程度です。

こういうことを無視して、聖書はすべて全人類に与えられた神の教え、神の戒め、神の命令だと受け取ったのが、ヨーロッパのプロテスタントであり、それをそのまま受け継いだのがアメリカのプロテスタントです。そしてそれが、なんの疑いも持たれないまま、日本に輸入され、そのまま教えられているのです。もちろん、厳密な学問の世界では、聖書に含まれているそれぞれの文書の宛先は注意深く研究されて、「全世界の人々」ではないことがはっきりしています。ところが日常のクリスチャン生活の分野、一般のクリスチャン信仰の世界、あるいは宣教という場では、聖書は「全世界の人々」に与えられた書物なのです。厳密な聖書の研究者であってもそうなのです。

その結果、旧約聖書の峻厳な神のイメージが、そのままキリスト教の神のイメージとなってしまいました。それで多くの日本人に、「優しい日本人の精神風土には合わない」と指摘されているのです。「私のほかに何者をも神としてはならない」と、厳しく命じ、厳重な罰則を適用する神は、八百万の神々を分け隔てなく敬う、おおらかな日本人の宗教心にはふさわしくないと、退けられているわけです。

これはまさしく、とんでもない誤解です。日本人が誤解したのではなく、西欧キリスト教が聖書を読み違え、その読み違えた教えを持ち込んだために起こった、日本人の誤解なのです。偶像礼拝の禁止、ただ、天地を創造した神だけを拝めという命令は、常識をもって、自然な態度で、普通の読解力で、先入観を排して、しっかりと聖書を読むならば、エジプトの奴隷生活から解放されたばかりの、ユダヤ人に向けて語られているということは、明々白々です。

「わたし以外に何者をも神としてはならない」というのは、出エジプト記20章3節の命令ですが、その命令に先立って、「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である」という言葉が(新改訳)、2節に記されている通りです。

つまりこの命令は、400年間に及ぶエジプトでの奴隷状態から助け出された、ユダヤ民族に対して、奇跡に次ぐ奇跡をもって彼らを助け出した神が、お命じになった言葉なのです。「私があなた方を救い出した神だ、だから、あなた方は私だけを礼拝しなさい」という意味です。創世記から始まる、人類とユダヤ民族との関係をよく読み取った上で、出エジプト記を読み、この十戒の部分を読むならば、誰でも、当然、そのような結論になるはずです。

旧約聖書全体を読むと、イスラエル民族はこの神の命令に背き、しばしば偶像礼拝に陥っていたことが分かります。神はそのたびに厳しく罰しながらも彼らを赦し、受け入れていかれたのです。この神とイスラエルの関係は、ホセアとその妻ゴメルの実物レッスンとして描かれています。ホセアは神の命令を受け、自堕落な生活をして見るも哀れな状態に陥っ

た女、ゴメルを助け出し、彼女と結婚するのですが、ゴメルは元の生活を捨てきれず、ホセアを捨てて他の男に走り、奔放な生活をくり返しては惨めな姿に陥ります。そんなゴメルを再三にわたって贖い出したホセアは、彼女に言うのです。「これから長く、私のところにとどまって、もう姦淫したり、他の男と通じたりしてはならない。私もあなたにそうしよう。」(ホセア3:3）これが偶像礼拝をくり返す民族に対する神の言葉です。ゴメルはあくまでもイスラエル民族です。日本人ではありません。ホセアのこの言葉は、他のどの女にも語られてはいません。ただ、ゴメルにだけ語られたのです。

ところがプロテスタント・キリスト教は、「聖書、聖書」と言いながら、聖書を正しく読んでいないのです。カトリック時代の権威主義を継承して、キリスト教は絶対の宗教である、ほかの宗教はみなダメな宗教、嘘の宗教であると断定してしまってから、その先入観でこの十戒も読んで、日本人にそのまま適用しているのです。その高飛車な態度が嫌われているのです。

素直に聖書を読むならば、旧約聖書が、ユダヤ人に与えられたものであることははっきりしています。そこに書かれている命令や戒めは、直接的には、すべてユダヤ人に向けて書かれているのです。もちろん、それを広く解釈して、いまの私たちにも適用することができる場合があると認めたとしても、直接的には、あくまでもユダヤ人であるという事実を、ないがしろにしてはいけないのです。

創世記から聖書全体を読んで行くと、ユダヤ人という民族は、神の救いを全人類にもたらすための器として、神ご自身によって選び出されたことがわかります。旧約聖書、つまり律法は、そのユダヤ民族が、全人類に神の救いをもたらす器として、ふさわしいものとなっていくために与えられた、教育の書物なのです。神のことも、人間としての生き方も知らなかった、まさに右も左もわきまえていなかった民族を、神の御用に向けて立派に育て上げるための教導書なのです。

旧約聖書、つまり、律法を与えられたユダヤ民族と、律法を与えられていない異邦人の違いは明白です。これを理解しないで、「クリスチャン文化」の中に生まれ育った自分たちを、あたかもユダヤ人であるかのように誤解して作り上げたのが、欧米の神学なのです。彼らは、自分たちこそ、霊的なユダヤ人、真実なユダヤ人であると単純に考えたのかもしれません。霊的なユダヤ人は、血筋によるユダヤ人とは違うのです。霊的ユダヤ人と血筋によるユダヤ人をまったく同一視する神学に、私たちは同調しません。旧約聖書、つまり律法は、血筋によるユダヤ人と、ユダヤ教に改宗して、ユダヤ人として認められた人々に与えられたものであって、霊的ユダヤ人であるとひとりよがりに自認した、欧米キリスト教文化に生まれ育った人々に、与えられたものではありません。

Ⅲ. パウロが教える律法

　パウロも、律法が適用されるのは、律法を与えられた者だけだと、しっかりと心得ていました。彼は「律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によってさばかれ」ると語っています。（ローマ2：12）律法を与えられている者と、律法を与えられていない者とには、大きな違いがあるのです。彼はまた、「律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われている」とも言っています。（ローマ3：19）

　律法を与えられたユダヤ民族と、律法を与えられていない異邦人との間には、明白に、神の異なった取り扱いがあるのです。数々の奇跡を通して、エジプトの奴隷状態から解放されたイスラエル民族は、その体験から、モーセが語り聞かせた神、昔から自分たちの先祖の名を被せて、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と言い習わして来た神が、他のどのような神々よりも力強いと理解しただけでなく、その神に強い恩義を感じたはずなのです。

　それが、人間としての当然の心の動きだったはずです。その恩義から、ユダヤ民族はモーセが語った「わたしはある」と自己紹介された神を、自分の神としようと考えて当然です。
ところが十戒はさらに一歩踏み込んで、「わたしだけを」礼拝しなさいと命じています。実際のところ、神と呼んで礼拝すべきものなど、他には存在しないのですが、モーセの時代にも、多くの人々は様々な神々を想定し、たくさんの偶像を作って礼拝していました。天地創造の記事が入っている創世記は、この十戒の付与の出来事から少し後に、この神こそ唯一絶対で、ほかの偶像の神々とはまったく次元の異なる、無限の神であることを教えるために書かれたのです。いわば、神の自己紹介です。「わたしはある」とおっしゃるだけでは、とても理解してもらえなかったからです。

　モーセが教えた神が唯一絶対の超絶したお方であり、他の神々とは次元の異なるお方だということは、エジプトの奴隷生活からの開放という奇跡的出来事と、天地創造という桁外れの物語を通してやっと理解されるもので、民族として、奴隷解放の奇跡体験をしておらず、天地創造の物語も与えられていない日本人にとっては、理解不可能なことなのです。

　その日本人に、いきなり、「キリスト教の神だけを礼拝せよ」、「偶像礼拝をしてはいけない」などというのは、まったくの見当違いです。ましてや、偶像礼拝を罰する恐ろしい神の裁きを、旧約聖書の物語から語っても、反感を買うのが関の山です。旧約聖書すなわち律法は、ユダヤ民族が神の役にたつ民族になるために、ユダヤ民族に与えられた教導書であって、異邦人である日本人の宗教を裁き、卑しめ、叱責し、破壊するための、断罪の書ではないのです。

　旧約聖書の命令あるいは教えは、それが普遍的な性格を帯びている場合は、当然、現在の日

本人にも及ぶものです。しかし日本人は旧約聖書を知らないし、知っていても正しく教えられてはいないのです。日本人に、旧約聖書が教えている罰則が適用されることはないのです。日本人はユダヤ人ではないからです。そういう意味では、キリストがお語りになった、ゲヘナでの裁きも、聞き手がユダヤ人であるという背景で、天地をお造りになった神を信じ、神が絶対に正しいお方であるとも、よく理解していたことを前提にお話になったのですから、日本人に適用されるべきものではありません。

パウロは「律法なしに罪を犯した者は、律法なしに滅びる」と語っています。旧約聖書という律法なしに罪を犯している日本人は、旧約聖書の律法によらずに、別の律法によって裁かれ、滅びるのです。救われるのではありません。全ての人間は罪人であり、滅びに定められていることに変わりはないのです。キリストの贖い以外に救いはないのです。

では、日本人を罪に定め、滅びにいたらせる律法はどこにあるのでしょう。それをパウロは「自分自身が自分に対する律法である」と語っています。（ローマ２：１４）律法を持たない異邦人を罪に定めるのは、彼ら自身という律法なのだと、パウロは言うのです。日本人が罪に定められるのは、旧約聖書の律法によるのではなく、日本人自身なのだと言うのです。

パウロはそう語ったあとに、「良心」を持ち出していますが、良心が律法になるのではなく、どうやら、良心もその律法の裁きに関与すると行っているように、読み取ることができます。（ローマ2：15）わずか一回だけの言及ですので、想像に立った解釈をあまり深めるべきではないと思いますが、少しだけ、神学的かつ哲学的な論を進めてみたいと思います。

Ⅳ.　自分自身の律法となる人間の本性

プロテスタント神学では、徹底して人間の罪悪性を教えますので、少し違和感を持つ人も多いかと思いますが、人間の本性は、それほど堕落してはいないと考えたほうが、聖書全体の記述に合致します。人間は、自分の能力では「見えない神」を正しく理解することも、正しく信じることも、救いに到達することもできません。そういう意味では、人間の本性は罪のために、救いに対してまったく無力になっています。

しかし、創世記1章26～27説に記録されている、人間が神の姿に似せて造られたという事実を、もっと大切な事実、もっと重大な意味を持つ事実とした考えましょう。人間は本来、神に似せて造られた存在です。本来の人間の姿、人間が人間である、本源的姿がここで語られています。この人間としての姿は、たとえどのような環境に陥っても、完全に破壊されてしまうことはありません。譬え悪魔の誘惑に陥って神に逆らい、罪にを犯してしまったあとであっても、神

の姿をことごとく失い、悪魔の姿に変わってしまったのではありません。

聖書全体を読んで総合的に判断すると、人間には、神に似せて造られた姿が、まだまだ、かなりしっかりと残っています。聖書自体がその事実を前提として書かれ、それを前提として与えられているのです。人間に、神に造られた本性がまったく残っていないとするならば、旧約聖書を正しいものと理解することもできなかったことでしょう。つまり人間は、本能的に善悪の判断をする能力をたもっており、教えられるならば、正しい神を正しく認識することもできるのです。

人間には神に似せて造られた、人間の本性がしっかりと残っています。神の愛と正しさに似せて造られた人間には、本源的に、あるいは本性的にというべきか、本能的がふさわしいかはともかくとして、人間の本来の性質としての愛と正しさを持っているのです。これはすべての人間に備わっているものであり、人種や文化を問いません。すべての人間が優しい愛の心を持ち、憐れみを感じます。すべての人間が公正を求め正義を追求します。

ところがこの人間の本性は、生まれ育つ環境の中で具体的な姿を現すものです。日本という国で生まれ日本の文化の中で育つと、日本的な良心を持つようになり、アラブの国で生まれ育つと、アラブ的な良心を持つのです。そして、日本的な良心とアラブ的な良心は、かなり異なったものとなります。それでも、その良心を深く掘り下げていくと、すべての人間に共通な、神に似せて造られた人間性に行き当たるのです。

異教徒たちを憎んで人質に取り、一切の哀れみの心も捨てて、大きなナイフで首を掻き切って殺し、その映像をメディアに流す回教徒たちの集団がいます。女学生たちを数百人も略奪して強姦し、あるいは殺し、あるいは妻にし、あるいは奴隷にする集団もいます。子供たちを略奪し、無理矢理に子供兵士に育てて戦わせる人たちもいます。私たちから見ると、あたかも人間性を失った行為のように映りますが、彼らにも、彼らの良心があります。彼らは自分たちの宗教が弾圧され、非人間的な取り扱いを受けたことに対して、彼らの良心に従って報復をし、彼らの良識に従って行動しているのです。良心や良識は異なっていますが、親や兄弟、自分たちの共同体に属する人たちが、非人道的取り扱いを受けたことに対して、悲しみ、傷んで、それを表現しているのです。その人間の本性は同じなのです。

この、すべての人間に共通な人間の本性、神に似せて造られた人間本来の性質こそが、異邦人の律法なのです。そしてこの律法はまた、ユダヤ人にも共通なものであり、モーセを通して与えられた律法に先立つ、根源的なものであると言えます。モーセの律法も、この万人に共通の律法を前提として与えられているのです。

人間の本性の具体的現れは、生まれ育つ環境や教育といった後天的なものによって、異なった表現をしますし、たびたび、ひとつの文化の良心が他の文化の良心とが衝突し、争うに発展してしまうこともあります。ですから異邦人は、良心によって裁かれるのではなく、良心よりも根源的な人間の本性によって、神に似せて造られている部分によって裁かれるのです。これが、パウロの言う、自分自身ということだと理解するものです。[1]

V. 日本人の良心と神意識

人間が神に似せて造られたということには、もう一つ非常に重要な局面があります。それは人間が神に似た霊的な存在として造られたという事実です。神に似せて霊的な存在として造られた人間には、霊的なものごとを感じ、霊的な事柄について理解することができるという、ほかのどのような動物にも与えられていない、特別な能力、特殊な本能を与えられています。そして日本人の良心は、この日本人の神意識と深くつながっています。

日本人の倫理観は、世界中の国々の中で、非常に高いと誰にも認められています。政治的にも社会的にも宗教的にも、実に様々な考えが渦巻く中で、これほど治安が安定し、犯罪が少なく、人々が安心して暮らせる国は珍しいと、世界事情に明るい人たちは口を揃えています。安定したプロテスタントの文化的土台がある、スカンジナビアの国々にさえ劣らないのが、非キリスト教国の日本なのです。

日本人の何から何まで素晴らしく、日本文化のことごとくが美しいとは思いませんが、たしかに日本人の倫理観は高く、優雅な文化に覆われています。それは、日本人の良心が研ぎ澄まされているからだと言えるでしょう。日本という文化の中で、日本人の良心が育成され、高度な倫理観となっているのです。その日本人の良心を育んだものは、日本人の心の奥に色濃く残っている人間の美しい本性、神に似せて造られた姿です。どこの国の人々にもこれは残っているのですが、日本人には特にしっかりと残っているからです。

それは、日本人の心の奥底にある宗教観に、深く関わっています。日本古来の宗教である神道には、本来、偶像がありません。ローマ書1章18～32節において、パウロは、偶像礼拝に陥った人間に対する、神の激しい怒りと厳しい裁きを記しています。それによると、偶像礼拝に対する神の裁きの結果、人間の本性、神に造られた本来の姿が酷く傷つき、損なわれ、堕落して

[1] 近代に至って、いわゆる伝統的キリスト教文化と言われてきたヨーロッパ諸国における、「キリスト教離れ」が急激に進んでいます。彼らはキリスト教文化の良心が、人間の本性から直接沸き上がってくる、自分たちの良心に合わないことに気づいたのです。本源的人間性から芽生えた彼らのヒューマニズムが、ユダヤ民族に与えられた旧約聖書に基づく、キリスト教の戒律や倫理に調和しないことに葛藤する一方、まったく異なったアジアやアフリカあるいは中南米の人々の、本源的人間性から発するヒューマニズムに、より良く調和することを見出したのです。人間にとって心の律法は、モーセが与えた律法よりも基本的であり、原則的であり、本源的なのです。モーセの律法は、ユダヤ民族という枠の中にあってこそ、本来の機能を果たすのです。

しまったのです。この堕落は、アダムの罪による堕落、いわゆる原罪に関わる堕落ではりません。アダムの罪のために堕落した人間でも、神に似せて作られている霊的感覚と知性を働かせるならば、当然理解できることなのに、それを理解せず、永遠の神の栄光を朽ちる偶像に代えてしまったことに対する、神の裁きの結果としての堕落です。この倫理的堕落はまさに人類の第二の堕落と言えるものです。

ところが、いにしえからの日本人の宗教である神道には、本来、偶像は存在しないのです。偶像を作らずこれを拝まない神道的感覚の日本人は、神の偶像礼拝に対する厳しい裁きから、まぬがれているのではないでしょうか。もちろん、日本人の宗教意識に偶像礼拝がまったくないとは言いません。たしかに仏教が入ってきてからは、仏教的な偶像礼拝が浸透しました。しかし、日本人の宗教心への影響は表面的なものにすぎません。ですから神は、日本人に対する裁きを、ほかの民族に対する裁きほどには、厳しくなさらなかったのだと思います。それがために日本人の倫理観は、比較的、高く保たれているのです。もちろん、このような考え方を、聖書の記述から断定することはできませんが、かなりの確率でそのように言えそうです。

ともあれ、日本人の神道的神意識は、普通に考えられているよりも遥かに高度なものです。実は、日本人が持っている「神感覚」と言うには、言葉上の問題があります。日本人が本当に心の奥で感じ、感謝し、崇め、讃えているのは、「神」ではないからです。神という「下等な表現」では表せない、尊く気高いお方なのです。だから、日本人は平気で「神など存在しない」と言い、冒涜的な言葉も吐きます。通俗化した神道の意識である八百万の神々や、古事記や日本書紀に出てくる神話の神々を、「愚かなもの」として退けます。それでいながら、自分を含めた人間の宗教心、すなわち目に見えなく、気高く、大きく、恵みと、優しさに富み、あらゆる良いもので取り囲み、自分を生かしていて下さる存在を感じている宗教心を、ことのほか大切にし、宗教の悪口を言うことは控えるのです。

日本人は神よりも、神々よりも高い存在を感じて、密かにそのお方を崇め、尊び、感謝しているのです。それは、なかなか表に現れてこない感覚で、日本人自身でさえ気づかないでいることが多く、ましてやとても説明できないものです。ところが、多くの日本人と親しく話してみると、これが大多数の日本人の宗教感覚だということが、よくわかります。

普通の日本人の多くは、神でも神々でもなく、もっと気高く大きな存在を心に感じながら、それを説明できないものと感じています。絵でも像でも言葉でも説明できない存在として、静かに崇めているのです。絵や像による偶像はもちろんのこと、「言葉によって描き出す偶像」とも言える神学さえ排除して、人間の思考能力の及ばない気高く大きなお方を、あえて説明する愚かさを避け、心の感覚のままに崇めているのです。

日本人は、この気高いお方が、すべての自然物の中に潜んでおられると感じています。その意味では汎神論的ですが、わずかでも通俗化すると、八百万の神々になってしまいます。ところが多くの日本人と話してみると、彼らが感じているのは、すべての自然物に（あるときは人造物にさえ）潜んでおられるお方であり、たくさんの、あるいは複数の存在ではなく、ひとつの、あるいは唯一の存在なのです。

神道には偶像がありません、言葉の偶像ともなり得る神学もありません。はじめから、大きく気高い存在者を、人間の知力と言葉で説明することなど、不可能だと知っているのです。ですから、日本人は自分の宗教感覚をことばで説明することはしません。神学をとても大切にするプロテスタントから見ると、まさに下等で未発達な宗教と言えますが、本当は非常に高い宗教感覚なのです。気高く尊い存在を持ち出して「神」と名付け、その神を、不完全で足りない人間の知恵と知識と言葉でもって、あたかもまな板の上の鯉のように切り刻み、解剖医のように分析してみせるキリスト教は、まさに下等な宗教なのです。

そのような高度の神感覚をもって、日本人は依代（よりしろ）として神社を建て、祠を作ってきました。ひとたび、依代ではあっても目に見えるものを作ってしまうと、そこからさらに堕落した宗教感覚に陥り、様々な名前の神々が祀られるようにもなりました。しかしそのような神社に詣でる時さえ、日本人はそこに祀られている神々を、あくまでも依代として見て礼拝の対象とはせずに、その背後におられる大きな存在を崇めているのです。そのために日本人は、どこの神社に詣でても、そこに祀られている神々にはほとんど無関心で、自分が感じている大きく気高い存在に向かって、手を合わせるのです。西行法師が伊勢神宮で、そこに祀られている天照大神を拝む代わりに、その背後に存在される目に見えないお方を想い、「なにごとのおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」と歌ったのは、そのような宗教心の現れだと考えられます。

たしかに神社や祠などを建てる日本人は、かなり偶像に近づく危険を犯しています。御神体などという言葉さえあって、あたかも、偶像となるものがそこに祀られているかのように言われますが、そこにあるのがなんであれ、（普通は何も置かれていませんが、米粒だったり、鏡だったりすることがありました）あくまで依代に過ぎません。依代とは、それを通して神の臨在を示すもので、礼拝の対象となる偶像とは異なっています。この依代は旧約聖書でも認められています。たとえばひと組のケルビムが乗せられていた契約の箱は、半歩間違えば偶像にさえなり得た依代です。中に入れられていたアロンの杖も、マナも、十戒が刻まれた石も、偶像になりやすいものでした。神殿も、かなり危険な依代です。荒野で挙げられた蛇などは、偶像と紙一重です。しかしそれらは、あくまでも依代として留まり、神の臨在を示し思い起こさせるものではありましたが、礼拝の対象とはなりませんでした。神道の神社や祠なども、本来はあくまでも依代としての存在なのです。

私の高校時代の友人のひとりは、お寺の跡取りでした。非常にできた男で、当時すでに父親に代わって檀家を周り、お経をあげ、様々な仏事を執り行っていました。熱心な欧米的キリスト教の信徒であったわたしは、しばしば彼と議論をしたものです。それで私が、「仏教は仏像を拝む偶像礼拝だ」と指摘すると、彼は、「通俗仏教では、たしかに弱い人間性を認容して、仏像を拝むことも許しているが、本当は、仏像はそれを拝む対象にする偶像ではなく、あくまでもその仏像をとおして、その仏像が象徴する仏の姿を見るべき、助けに過ぎない」と答えたものです。彼の言うことが仏教本来の教えなのか、彼のお寺の宗派の説くところだったのか、彼というひとりの人間だけの仏教だったのか、残念ながら、大学生になってすぐに亡くなった彼と、話し合いを続けることはできなくなってしまいました。でも、いま思い直すと、彼が感じていた「仏像の背後の見えない仏」は、どうも、仏教のいう仏よりも、なんとなく、日本人の宗教意識にある気高く尊い存在のように感じるのです。

ともあれ、日本人は、常にこの気高く尊い存在を感じながら生きてきました。しかも、旧約聖書に現された怒りの神、いつでもどこでも、悪い奴はいないかと見張っている恐ろしい神、罪を罰してやまない神としてではなく、優しく美しい自然をもって私たちを包み、あらゆる良いもので私たちを覆って下さる、めぐみ深いお方が、ご覧になっていると感じてきました。そしてこのお方の前に、このお方に喜ばれる正しい生きかたをしようと願ってきたのです。それが日本人の良心です。心の奥深くに隠された感覚です。説明のできない感覚です。でも日本人は、何につけ、この感覚によって行動してきたのです。地震の時も、津波の中でも、洪水の場合でも、この良心が行動の規範になったのです。

日本人は、自分たちも天と地を造られた神に似せて、造られているという事実を知りません。しかし偶像礼拝をせず、神の厳しい裁きをあまり受けておらず、神に似た美しい本性をより多く残しているために、その美しい本性を活かして、非常に良心的に生きているのです。日本人ひとり一人の中にある、律法がそのようにさせているのです。[2]

VI. 日本人の裁き

パウロは、ユダヤ人に与えられた律法によって、日本人が裁かれることはないと、はっきりと語っています。日本人の裁きは、日本人に与えられている律法に照らし合わせて行われるので

[2] 日本人の多くが、同じヨーロッパ諸国の人たちでも、しっかりとしたクリスチャン信仰を告白する人たちよりも、キリスト教に縛られないヒューマニストたちに親しみを覚え、共に生きていくことができると感じます。それは、どちらも、本源的人間性を大切にするからです。本源的人間性を大切にする人ならば、どのような社会的、文化的、あるいは宗教的背景に生まれ育った人たちとも、かなりの共通意識を持って、理解し合うことができるのです。旧約の律法がユダヤ民族に与えられたものであり、キリスト教はユダヤ民族の宗教背景から生まれてきたことを正しく理解するクリスチャンは、絶対の神を認めるヒューマニストとして、このようなヒューマニストたちと心を通わし、神について語り合うことも可能です。

あって、旧約聖書の教えによってではありません。日本人を出エジプト記20章の十戒で裁くのは間違っています。ところがそれを容赦なくやり続けてきたのが、日本のキリスト教です。西欧で、西欧人の感覚で読まれた聖書から、西欧人の考え方と生活に都合よく組み立てられたキリスト教を、直輸入したままのキリスト教です。

昔、日本の自動車がアメリカで大量に売られるようになった背後には、日本の自動車メーカーの大変な努力がありました。アメリカの道路状況、交通法規、家族事情などあらゆるものを考慮し、それに合うように改良し続けた結果、それが可能になったのです。ところが、一時は日本人のステータス・シンボルになっていた、大きくて重い豪奢なアメリカの車が、どんどん売れなくなってしまったことがありました。自分たちの車は高品質だと言い、これを買わないのは買わない日本人が悪いと考え、日本の道路事情や交通法規、家族の事情や必要性などをいっさい考慮しない、押し付けだったためです。

日本に入ってきたプロテスタント・キリスト教は、すでに150年以上経過しているのに、まだ、昔のアメリカの車のように、独りよがりを押し通しているのです。日本の事情をまったく考えず、日本人をまったく学ぼうとせず、西欧の宗教を押し付けようとしているのです。キリスト教は西欧の宗教です。間違った聖書理解で、日本人を高圧的に裁く宗教です。

西欧キリスト教が、間違った聖書理解で日本人を裁いている事など、日本人は知りません。殆どの日本人クリスチャンも知らないことです。それがキリスト教だと思っています。そして、普通の日本人の多くは、そのようなキリスト教を受け入れることはできないと、判断しているのです。それが、日本人にはクリスチャンが少ないという、明らかな結果となって現れているわけです。たとえ、キリストの教えの高い倫理に感動し、キリスト教神学の高度なことに驚いたとしても、自分がクリスチャンになろうなどとは思いません。

キリスト教以外の宗教をすべて否定し、日本の文化を蔑み、日本人の生活習慣を断罪するようなキリスト教は、日本にあっては、反社会的宗教なのです。地域の宗教行事には参加せず、お葬式にも出ないクリスチャンが、「偶像礼拝に勝った」と証しするごとに、自分は絶対にクリスチャンにならないと決心する日本人がたくさん起こり、自分の身近な者がクリスチャンになることも絶対に許さないと考える日本人が、大勢、現れるのです。

「何をしてもかまわないが、他人(ひと)様に迷惑をかけることだけはするな」というのが、大方の日本人の父親が、子供に与える唯一の教えらしい教えです。他人に迷惑をかけることを最大の悪と考える、「思いやり」の文化にあって、キリスト教は思いやりを欠く宗教として、嫌われるのです。

とは言え、日本人は自分たちに与えられている律法、神に似せて造られた姿によって、救われるのではありません。律法は生き方を示し、道を教えるものであり、救いをもたらすものではありません。かえって、これに反するものには裁きをもたらすのです。日本人は、日本人に与えられている心の律法によって裁かれます。絶対に救われません。だからこそ、日本人にも福音が必要なのです。

Ⅵ. キリストによる救い

日本人の良心がどれほど研ぎ澄まされていても、日本人の倫理観がどれほど高くても、日本人も罪の中にあり、キリストの贖いを必要としているのです。キリストの贖いの業がなくては、一人の日本人も救われることはありません。そして、日本人が救われる条件は、パウロの時代のユダヤ人が救われたのと、同じ条件です。条件として求められるのは「信じること」です。それ以外にはありません。ユダヤ人もギリシヤ人も奴隷も自由人も、みな、同じ信仰によって救われるのです。

ところで、ユダヤ人以外の人も、「キリストを信じる」ことによって救われるのでしょうか。新約聖書を読むと、たしかにそのように書いてあります。ところが、そのキリストを信じる信仰によって救われるという、普遍的福音の奥義を説明していたパウロは、突然、話をアブラハムに転じ、アブラハムも信仰によって救われたという事実に、読者の目を向けさせています。アブラハムは信仰によって義とされました。信仰によって救われたのです。

ところが、パウロはなんの説明もしていませんが、アブラハムは、「キリストを信じる信仰」によって救いを得たのではありません。彼の時代には、キリストはもちろん、ユダヤ民族さえまだ存在していなかったのです。アブラハムはユダヤ人でもイスラエル人でもなく、ヘブル人でした。つまり厳密に言うと、アブラハムは律法を与えられたイスラエル人でもユダヤ人でもなかったのです。彼は、律法を与えられていない異邦人と同じ立場にいたのです。

アブラハムはキリストを知らず、十字架を知らず、罪も、悔い改めも知りませんでした。彼が信じたのは「キリスト」ではなく「神」でした。もしそうだとしたら、いま、異邦人としての日本人、律法を与えられていない日本人も、キリストを知らずに救われることはできないのでしょうか。旧約聖書と新約聖書を通して脈々と流れているユダヤ人の感覚、ユダヤ人の神知識、ユダヤ人の律法の知識、ユダヤ人の罪の意識を前提とした教えは、はたしてそのまま、異邦人に適用されるべきものでしょうか。

異邦人への使徒パウロは、このユダヤ人と異邦人の狭間で悪戦苦闘しながら、聖霊の導きによって、異邦人のための神学・・・というよりも、普遍的福音の神学を打ち立てました。ところが

彼が活躍していた世界は、グレコローマンという大きな枠で括られる文化でした。たしかにユダヤ人と異邦人が対比されたのですが、大きく括ると、グレコローマン文化の中なのです。

その上、彼が直接伝道した対象のほとんどは、ユダヤ人もしくはユダヤ化した異邦人でした。パウロは神学的にはたしかに異邦人の使徒であり、異邦人のための福音の神学を打ち立てたのですが、彼が採った宣教の手段は、地方の大都市を訪れ、ユダヤ教の会堂を訪ね、そこにいるユダヤ人に説教するというものでした。彼が取り扱った異邦人の大部分は、そのユダヤ人の会堂に来ていた、すでにユダヤ教に強い関心を持ち、ユダヤ教を受け入れてユダヤ人になることも考えていた人たちでした。現在の私たちの宣教対象である日本人のように、ユダヤ教の背景も影響も知識もまったくない文化に育った人たちではないのです。もちろんパウロは、時間さえあればアテネやコリントやエペソでやっていたように、会堂以外の場所でも福音を語っていたのですが、現在の私たちのように、語る相手が常に異邦人という状況とは異なっていました。

キリストを信じる信仰の話から、なんの前触れも説明もないまま、突然神を信じる信仰の話に飛躍しても、議論が通じる人々を主な相手として伝道していたパウロの理屈を、日本人に当てはめても無理なのです。もちろん思慮深いパウロのことですから、たとえばアテネでの出来事のように、まったくの異邦人に向けて話すときには、それなりに、かなりの考慮をしていることがうかがわれます。

アテネにおいてのパウロは、いつものように「イエスと復活」のことを語っていましたが、語る相手が完全な異邦人群衆であることを見て取ると、話のもって行き方を変えて、イエスについてでも甦りについてでもなく、天地の造り主である神についてから話を始めています。（使徒17：16～34）ルステラで、ギリシヤの神のひとつであるヘルメスと間違われたときには、積極的に伝道していたわけではありませんが、まったくの異邦人の群衆を目の当たりにして、やはり、天地の創造者である神についてから、話を始めています。（使徒14：8～18）

このように異邦人を相手にしていても、ある程度の回心者を得ることができたパウロは、さすがだと思いますが、さらに徹底した異邦人の中では、さしものパウロも、まったく回心者を得ることができませんでした。ローマに連れて行かれる船旅の途中、嵐にあった一行はマルタという島に漂流し、そこでひと冬、3ヶ月を過ごす羽目になってしまいました。御霊に溢れていたパウロはここでも多くの癒しを行い、島の人々から非常な尊敬を受けたと記録されていますが、ひとりの回心者も出ていないようです。はたしてパウロは、マルタ島でもキリストと甦りの話をしたのでしょうか。それとも、天地を造られたお方の話をしたのでしょうか。ユダヤ的な信仰心や物の考え方をまったく持っていない、異邦人に福音を理解してもらうことは、聖霊に満ちたパウロをもっても困難なことだったのでしょう。

徹底したユダヤ教徒であったパウロは、クリスチャンになったときにユダヤ教を捨てたのではありません。ユダヤ教の理解の上に救い主キリストを理解し、その理解の上にまた、普遍的福音を理解したのです。パウロにとって、キリストを信じる信仰と神を信じる信仰は同じものであり、そこにはなんの亀裂も乖離もなかったのです。パウロの手紙を読んだ初代のクリスチャンたちにとっても、それは理解できたことだったのでしょう。ところが、私たち日本人にとっては、まったく異なるものです。

Ⅶ. 神を信じる信仰

ユダヤ教徒が信じていた天地創造の神を、日本人が信じるのは案外やさしいことであると思います。いままで、それが難しいものとされてきたのは、クリスチャンたちが神の話をする前に、キリストの話を持ち出してしまうことが多かったために、話が神に至る前に、日本人を躓かせてしまったためであったと思われます。次に、神の話をする場合でも、聞いている日本人の神意識、日本人の宗教心をまったく理解しようとせず、一方的に西洋的福音を語っていたたためだと考えられます。旧約聖書の律法が、誰に対して与えられたのかという、極めて初歩的なことを誤解して、まったくの見当違いに気づかないまま、上から目線でめ語っていたからでしょう。旧約の律法はイスラエル民族だけに限って、彼らだけに特別に与えられたものであることを無視して、その律法を滅多やたらに振り回し、侮蔑と非難と断罪を繰り返し、「日本人は偶像礼拝者である」と、叫び続けて来たためでもあるでしょう。

異邦人宣教には、私たちほどの経験を持っていなかったパウロでさえ、まったくの異邦人聴衆を前にしたときには、キリストの話からではなく、天地創造の神から話を始めています。私たちもそれに倣うべきなのです。キリストの話を最初に持ち出すと、異邦人である日本人の宗教感覚や神意識との共通部分が非常に少なくなり、すぐにすべての人間は罪人であるという、とても取り扱いが難しい話題に、行き着いてしまうのです。どうしてもキリストの話を持ち出したい時には、キリストの高い道徳律や愛についての教えを語り、日本人の高度な倫理観との共通土台に立つべきです。十字架の贖い、罪の許しなど、日本人に馴染みのない、不可思議なことについて話し出すと、際限のない混乱の中に踏み込むことになります。

ところが同じ異邦人でも、神意識、宗教心という意味では、日本人はパウロが宣教したどの民族よりも、高度なものを持っているのです。日本人は、既に述べたように、神道の神学を持っていません。それは神道が低級だからではなく、高尚だからです。日本人の心の奥底にある宗教心は、下等な「神」に対するものではなく、目に見えない、尊く気高く大きく優しく、強く憐れみ深く恵みに富む、至高の「存在」に向けるものなのです。ユダヤ民族が、自分たちの神として天地の創造主を礼拝しだした当初は、「神」という言葉を、周辺の民族の宗教の中から探し出

し、借用していました。それ以外に方法がなかったからです。数々あった神々の中から、より天地の造り主にふさわしい名前を選び出し、「とりあえず」、「間に合わせ」として用いたのです。それが年月を費やして、よりふさわしい名に変えられて行ったわけです。

すでに述べたように、「神」という日本語は、何かにおいて人間より幾分高い能力を持っているだけの意味で、日本人が心の奥に感じている、気高く尊い存在を言い表す言葉ではありません。ひとたび「神」と表現されると、それは八百万の神々や神話の神々となり、人間が本当に崇め尊ぶ存在ではなくなってしまうのです。日本人には、心の中に感じ、崇め、恐れ、尊んでいる存在を言い表す言葉、お呼びする言葉がないのです。それにもかかわらず、日本人の宗教心を表す言葉は神道であり、「神」なのです。ですから、それがどのような神であっても、「神」と呼ばれたならば、あくまでも目に見ることも口で説明することもできない、真に尊い存在ではなく、せいぜいその存在を象徴する事物か、良くても依代に過ぎないのです。日本人の多くはおぼろげながら、この気高き存在が、あらゆる自然物の中に潜んでおられると感じ、すべての自然物が、広い意味で依代であるかのよう思っています。あるときはそれらの依代を拝むような間違いさえ犯しています。しかしその実、それらの依代の背後におられる気高い存在を、ほとんど、唯一の存在であるかのようにも感じているのです。言い方を変えると、日本人の宗教心にある存在者は、旧新約聖書に示されている神の姿に、非常に近いということです。

それは私たちクリスチャンが、欧米で発達した「他宗教排斥」の高圧的キリスト教の態度を捨てて、相手の立場を尊重し、寛容な態度で話し合いを試みるならば、理解してもらえることが多いのです。この日本人の高度な神意識を共通土台にして、私たちは天地創造の神を語り、日本人が心に感じ、良くは分からないままに尊んできた存在こそ、この天地創造の神、絶対の神、聖く、気高く、大きく、強く、恵み深く、憐れみに富む、聖書が教える神であると語ればいいのです。昔から日本人が崇め、祀り、手を合わせてきたお方は、実はこのお方だと教えてあげればいいのです。

私たちは外国から輸入されてきたキリスト教の神を語るのではなく、昔から日本人が感じてきた優しく恵みにあふれたお方を、改めてしっかりと認識して、感謝しながら、その大きな力と慈しみに信頼すれば良いのだと、語ってあげるのです。すると、多くの日本人は懐かしい気持ちで、あたかも長いあいだ離ればなれになっていた親にでも出会ったかのように、なんの抵抗もなく、違和感も持たず、天地の創造主をあがめるようになる筈です。「神」という言葉は、あくまでも翻訳上の仮の名前であって、本当は、口に出すのももったいない至高のお方なのですと説明すれば、日本人の神観にぴったりなのです。

日本人は、キリストを信じる信仰を理解するには、非常に長い情緒的、感覚的、そして理知的な距離を歩まなければなりません。しかし神に信頼し、崇め、尊び、その恵みと優しさに感謝す

ることならば、本当に、半歩踏み出すだけでいいのです。

アブラハムは「神を信じて」義とされました。アブラハムはキリストを知らず、十字架についても聞いたことさえありませんでした。しかしアブラハムは、このキリストの十字架の贖いの故に救われたのです。ただ、その救いはアブラハムがキリストを知っていたとか、十字架の意味を理解していたとか、自分の罪を悔い改めたとかいうことには、一切関係なく与えられました。アブラハムがキリストを知らなかったとしても、神がキリストとその贖いのみ業をご存知でした。アブラハムが十字架の事実と意味を知らなくても、神がご存知でした。アブラハムは、自分の罪を悔いて告白したから義とされたのではなく、神を信頼した、神に頼ったから救われたのです。キリストについて理解したからではなく、神に頼ったから救われたのです。救いとは知識の問題ではなく、信頼の問題なのです。神への信頼に対する神からの答えなのです。知識や理解ではなく、暖かい信頼関係が問われているのです。

ところが、律法を与えられ、千年を超える長い年月をかけて、神に教え導かられて来たユダヤ人に対しては、救い主であるキリストに対する信仰と従順が要求され、キリストの十字架と甦りの後は、十字架の意味の理解と悔い改めが条件とされたのです。より高度に教えられた者には、より高度な条件が加えられたのです。

Ⅷ.　キリストの救いを受け取る

使徒の働きや書簡を読むと、ペテロやパウロを始めとする弟子たちも、キリストの十字架についての理解と罪の悔い改めを、救いの条件にしていたように理解されます。しかし初代の教会の福音宣教の中にも、福音の理解の進展が見られ、必ずしもキリスト昇天直後に語られた福音の内容が、まったく同じように、いつまでも語られていたのでもないようです。とくに、パウロを通して普遍的福音の奥義が語られると、その理解はもっと深められ、さらに巾の広いものとなっていきました。

キリストの死と甦りが記憶に新しかった当時は、当然、それが宣教の力であり「売り」でもあり「推し」でもありました。福音を聴く者の多くも、ユダヤ人かユダヤの宗教を背景に持っていた人々でした。しかし、教会の中に異邦人の数が増え続け、やがて異邦人の数の方が多くなるような事態の中では、強調点が変わっていったのは当然です。まだまだキリストと十字架と復活が福音の中心であり、悔い改めが強く勧められていたとしても、教会の外の宣教の場では、だんだん、天地万物をお造りになり、人に命を与えて生かしていて下さる、大きく、めぐみ深い神の存在と、その神に信頼するべきことに、話の中心が移行していったと考えられます。

パウロのアテネでの説教はその良い例です。パウロはここでもキリストの死と甦りについて語

っていますが、そこに至る前に、天地万物の創造者について語っています。ただ、甦りという福音の中核に話が及ぶと、人々は去ってしまいました。パウロは先を急ぎすぎたのです。

またパウロはここで、「悔い改め」を勧めたかのように言われていますが、(V30)これは誤訳であったと言えます。あえて言うならば、意図的な誤訳です。なぜなら、ここで「悔い改め」と訳されている言葉は、たしかに、紀元前2世紀頃に訳された70人訳では、「悔い改め」という意味で用いられたために、その後のユダヤ人の宗教的文脈では、「悔い改め」を意味するようになっています。新約聖書もそういう意味で用いています。ただ、パウロがアテネを訪れたころ、ユダヤの宗教文化に馴染みのない人々の、普通のギリシヤ語では、まだ誰も「悔い改め」という強烈な意味では用いておらず、もともとの意味の、「考え方を変えて」という程度の言葉でした。パウロもここでは、それほど早く悔い改めを持ち出したのではなく、ギリシヤ人たちに、曖昧もことした神意識を横に置いて、つまり「考え方を変えて」、明確な天地の創造者を信じなさいと勧めたと考えたほうが、前後関係に良く合います。ギリシヤ語の文化圏で育ち、ヘブル語で最高教育を受けていたパウロは、このことを良く理解していたはずです。それをいま、あえて「悔い改め」と翻訳するのには、翻訳者の下心が感じられます。

わたしは、イエス・キリストを語らなくても良いと、言っているのではありません。十字架も復活も、罪の悔い改めも、福音の中核です。しかし異邦人に対しては、最初からキリストの話をするよりも、まず、天地万物の造り主である神について知ってもらい、このお方がどれほど豊かに私たちを恵み、太陽を昇らせ、雨を降らせ、作物を実らせ、家畜を育てて私たちを育んでくださったかを、知ってもらうほうが先だと言っているのです。特に日本人はこのようなお方を心の奥底に感じ、良くはわからないままに崇め、尊び、感謝し、祀ってきたのです。

このお方に生かされてきた、ありがたいという実感を強くし、その感謝の気持ちを、誰かわからないお方にではなく、天地の創造者であられるお方にしっかりと向けてもらうことが、何よりも先に大切なのです。食事をするとき、多くの日本人は「いただきます」と言いますが、その言葉を、料理を作ってくださった人や給仕をしておられる人だけにではなく、背後にいる見えない人にも向けて言っています。そして大切なのは、背後にいる見えない人に対してだけではなく、背後におられて作物を実らせ、動物を育て、魚を養ってくださった、目に見えない恵み深いお方に向けて言っているのです。このお方を、天地創造の神と理解し、このお方に向けて、「いただきます」と言えば良いのです。

このお方の恵みをより強く感じ、理解してもらうと、その恵みに対して、はたして自分たちは、ふさわしい感謝と礼拝をしてきただろうかと、反省してもらうこともできます。自分たちの感謝が足りなかったことは、誰でも容易に認めることができます。また、いろいろな方法で僅かながらでも表した感謝の気持ちも、はたして、本当に喜んでもらえ、受け入れてもらえるもので

あったか、思い巡らせてもらうことも可能です。そして、自分たちの感謝が曖昧であり、余りにも少なかったと思い当たることになります。天と地を造り、私たちに命を与え、良いもので恵み、生かし続けておられるお方に対する感謝としては、いささかおざなりであったことがわかります。自分たちのことばかりにかまけて、大切な天地の創造者をなおざりにしてきたことも、すぐに理解できます。

ですから私たちは、この天地の創造者に謝ること、お詫びをすることを勧めます。充分に感謝しなかった不義理を詫びるように教えます。豊かな恵みに対して冷淡であったことを、親不孝を詫びるように、お詫びをするようにと勧めてあげます。天地を造り、生かしてくださっていたお方に「不孝をくり返してまいりました」と、赦しを乞うことを教えて差し上げます。このようなお詫びの気持ちは、誰かに生かされていると感じ、どなたかに「ありがとうございます」と言いたいと感じている人ならば、だれでも持つものです。それをはっきりと確認して、心の中で感じて来た気高く尊いお方に、申し上げるようにと勧めれば良いのです。欧米から渡ってきたキリスト教では、このことを「罪を悔い改める」と言うのかもしれませんが、伝統的な日本語で言うならば、不義理をお詫びし、不孝を謝るのです。

そこまでお話すると、キリストの必要性、仲保者の必要性もわかってもらえます。日本人は罪の意識よりも、恥の意識を持っていると言われてきましたが、宗教感覚としては、罪や恥よりも、穢れの意識が強いと感じます。目に見えなく気高く聖く大きなお方の前に出るには、自分はふさわしくないと感じる心です。そのため、神社には浄めを象徴する水が置かれています。

ここまで分かってもらうと、キリストの十字架についても、非常に話しやすくなります。キリストの十字架が、なぜ必要だったかということも、それがなぜ、神の愛の最高の表現なのかも、無理なく説明できます。そして、キリストの復活がどれほど素晴らしいことであるかについても、語ることができるようになります。神が整えてくださった救いの道、キリストが完成してくださった救いのみ業を、感動をもって聞いてもらえるようになります。新約聖書的な悔い改めが、日本人にもできるようになるのです。親の財布から100円玉を盗んだことを思い起こさせて、罪の告白をさせるようなやり方ではなく、罪の本質に触れて、罪の告白をさせることができるようになります。

神を信じることで、昔のアブラハムが救われたように、異邦人である現在の日本人が救われるかどうかという問題は、私が本当に論じたいことではありません。実際上、それはあまり重要なことではありません。私たちがどの時点で救いに入るのか、神を信じて救われるのか、キリストを信じて救われるのか、神のみがご存知のことです。

ただ重要なことは、異邦人である日本人には、日本人の宗教心を理解して、まず、天地創造

の神について語り、このお方に感謝し崇め信頼することを教えたほうが、キリストの話から話を始めるより、よほどよく理解してもらえるということです。結局そのほうが、圧倒的に早くキリストの十字架の話にも到達でき、正しい悔い改めに導くこともできるということなのです。

普通の日本人に、キリストの十字架と贖い、神の絶対的聖さと人間の罪、悔い改めと赦しなどという理屈を教えても、頭を混乱させるだけで納得してはもらえません。議論に終わってしまうのが関の山です。しかし、日本人が本能的に持っている宗教心に訴え、誰もが感じている目に見えない大きなお方について、情緒的に、感謝と信頼という情の問題として語ると、とてもよく納得してもらえるのです。

結び

今年の春頃になって、私は、このような聖書理解をもとにした伝道を始めました。信徒たちに対しては既に数年前から、少しずつ、これまでの社会に敵対するようなクリスチャン信仰ではなく、社会の妨げにならない信仰生活、家族親族の中で受け入れられる信仰のあり方について語り続けてきました。それはそれで、小さな教会ながら成果を上げてきたと思います。ただ、伝道という面では信徒たちの日常の証に期待するだけで、私自身がこのような聖書理解に立った伝道に、直接取り組む機会はあまりありませんでした。

ところが昨年の末ころから、私に個人伝道の機会が訪れてきました。相手はと言えば、ほとんどが普段教会に来ることができない、病人やお年寄り、あるいは日曜日にも仕事をしなければならない、地方都市とその周辺に住むごく普通の方たちでした。みな、いわゆる過疎化の中で、何につけても保守的な感覚で生きてきた、言うならば、かなり難しい伝道相手で、教会の集いに出席するなどということは、あり得ない類の人たちでした。ところが、キリストを最初に持ってこない私の個人伝道法は、今までとはまったく違う結果をもたらしたのです。

個人伝道をしている6人のうち5人が、まだまだ弱いとは言え、「キリストを信じる信仰」を持つようになりました。先日はそのうちの二人が洗礼を受けました。80歳と78歳の夫婦です。このふたりの洗礼（滴礼）を家で見ていた二人の娘さんたちが、強い興味を持ち、一人は洗礼を受けることさえ考え始めています。これは実現するかどうか、まだ確実ではありませんが、おおいに望みがあります。他にも二人が洗礼を受けようとしています。これらの場合、今までの伝道とは異なって、非常に良く理解してもらえ、受け入れてもらうことができたのです。躓きや妨げになるような議論は、まったく起こりませんでした。

またつい最近、80歳をかなり超えてから救いにあずかり、教会には出席できないまま天に

召された、93歳の男性の葬儀を行いました。キリスト教式の葬儀だとは知らずに、数珠を手に参列した300人近くの年配者に向けて、私は語りました。

「ご列席の皆様の中には、〇〇さんの葬儀がキリスト教式で行われることに、驚いておられる方も多いかと存じます。また〇〇さんがいつの間にかクリスチャンになっていたことに、なにか、自分たちの知らない外国の神様を信じて、遠くに行ってしまったかのような違和感を持ち、寂しさを感じておられる方もいらっしゃるかと思います。しかし〇〇さんは、皆様が知らない神様を信じて、皆様から遠く離れてしまわれたのではありません。

ご存知のように、〇〇さんは士官学校を出て大陸にわたり、数々の戦闘をくぐり抜けて陸軍大尉にまでなられた方です。終戦後は故郷に戻り、身を粉にして家族を養い、地域の発展のために尽くされたと伺っております。その様な典型的な日本人だった〇〇さんは、80歳をかなり超えてから、クリスチャンになられました。幼い頃から心の中で密かに感じていた、太陽を昇らせ、雨を降らせ、穀物を実らせ、あらゆる良いもので自分を恵み、祝福してくださっていた、目に見えない大きなお方のことを、聖書という書物を通して、はっきりと知ることができるようになったからです。自分に命を与え、生かしてくださっていると心の奥深くで感じ、良くはわからないまま、密かに手を合わせ、感謝をささげてきた、強く、優しく、気高いお方が、実は、聖書が教えている天と地をお造りになった神様であると、はっきりとお分かりになったのです。そこで、改めてそのお方を自分の神様として認め、『天と地をお造りになった神様、私を生かし恵んでくださったことを感謝申し上げます』と、お祈りするようになっただけのことです。

〇〇さんは、外国から連れて来られた知らない神様を信じたのではありません。昔から多くの日本人が心の奥深くで感じ、祀り、崇めて来たお方を、改めて、『天の父なる神様』とお呼びして、お祈りを捧げるようになったのです。まるで幼い時に別れたままになっていた、お父さんに出会ったかのように、とても懐かしい気持ちで、『天のお父様』とお呼びしたのです。ですから、〇〇さんは皆様と違う神様を信じて、遠く離れた人になってしまったのではありません。皆様も昔から、良くはわからないけれど、心の深くに感じて、『ありがとうございます』と手を合わせておいでになった、そのお方を、改めて理解し、信頼し直しただけなのです。

〇〇さんは、天と地をお造りになった神様をはっきりと信じ、感謝を捧げる人となりました。そしてこの神様から、ご褒美として永遠の命を頂いて、今はもう、苦しみも悲しみも痛みもない、天のみ国に招き入れられて、大喜びをしていらっしゃいます。ですから、〇〇さんのために悲しまないでください。しばしの別れで、寂しくまた悲しく感じることはあっても、大いに喜んで上げてください。『〇〇さん万歳』と叫んでください。いま〇〇さんが残念に思っていることがあるとしたら、それは、最後に皆様にお会いする機会がないまま、旅立ってしまったことです。いま、天のみ国で〇〇さんが願っておられることは、懐かしい皆様が、同じように天地をお造り

になった神様から、永遠の命をいただいて、同じ天のみ国に来てくださることだと思います。」

　私が語ったのは、極めてまっすぐな福音です。でも、遺族の方々はとても喜んでくださいました。清楚で短い葬式だったというだけでなく、福音のメッセージに感動されたお年寄りも多かったと伺いました。躓いたり腹を立てたりした人は、「まったくいなかった」とも聞かされました。初七日の代わりに行った「偲ぶ会」でも、同じ観点からお話をしました。遠くから来ておられた長男ご夫妻がとても感動し、次の日曜日には、わざわざ帰宅を遅らせて、私たちの礼拝会に出席してくださいました。この方は、キリスト教にはむしろ強い反感を持っておられたということでした。

　私はここで、自慢話をしようとしているのではありません。たまたま、ひさしぶりに伝道が上手くいって、舞い上がっているのでもありませ。また単に、「効果がありそうだから」とお勧めしているのでもありません。本題はどのように聖書を読むかということです。わたしの願いは、聖書が教える本物の福音、普遍的な神の救いについて、より分かりやすく、もっと受け入れてもらえるように語りたいだけです。異邦人である日本人も、はじめから、神の福音の対象者と定められています。日本人も、西欧的な福音理解、ユダヤ的な聖書の理解から脱した、真に聖書的なキリストの福音を聞かされるべきなのです。ユダヤ人のための福音の、「おこぼれ」に与るようではいけないのです。西欧の人々のための福音の「お古」で、満足させられていてもならないのです。